

# 花鈿の後宮妃2

皇帝を守るため、お毒見係になりました

秦 朱音 Akane Hata



アルファポリス文庫

## 第一章 雪夜

青龍国の後宮で初めて迎える冬の、とある朝。  
円窓の外から聞こえ始めた侍女たちの声で目を覚ました私は、重たい瞼を開けた。  
牀簾の上、掛布の中は温かくて心地好いの、頬や額に触れる空気は刺すように冷たい。早く火鉢に火を入れなければと考えながら寝返りをうつと、腰のあたりに回された太い腕が私の体を引き寄せた。

（永翔様、もう起きてる？）

私の隣にいる男性は、ここ青龍国の第十四代皇帝、青永翔様。

冬の寒さが苦手な永翔様は、火鉢で房室が十分温まるまで眠っていることが多い。まだ薄暗い中で彼の顔を覗き込んでみるが、両瞼は閉じたまま。息もゆっくり穏やかで、どうやらまだ夢の中にいるようだ。

（なんだ、寝惚けて私を抱き寄せただけなのね。さあ、今のうちに火鉢を準備しておこう）

永翔様を起こさないように腕をゆつくりとすり抜け、床に片足を着ける。凍える寒さの中を手探りで上衣を掴み、肩から羽織った。

殿舎の外にはもう侍女たちが控えている。扉を少し開けて侍女の子琴に中に入るよう声をかけると、小雪混じりの冷たい空気が吹き込んだ。

「雪……？ どうりで今朝は特に寒いわけね」

「明凜様、早く中にお入りください。皇帝陛下の寵愛を一身に受ける妃に風邪を引かせてしまつては、私が罰せられてしまいます」

子琴は慌てた様子で、私を房室の中に押し戻した。

「寵愛を一身に、なんて大げさよ。まだ陛下は眠っていらつしやるから、少し声を落としてくれるかしら」

「……はい！ 失礼しました！」

「子琴、だから静かにしてつてば……」

慌てて子琴の口に指を当てて黙らせたが、少々手遅れだったようだ。牀簾の掛布の中からくしゃんと一回、永翔様の大きなくしゃみが聞こえてきた。

青龍国皇帝の後宮で暮らす私——曹明凜は、前世の記憶を持っている。

私の前世は、現代の日本に生きる、ごく普通の会社員。仕事を終えて家に帰る途中、

駅の階段で足を滑らせて転げ落ちたところまでは記憶がある。恐らく前世の私は、その時に頭を打って絶命したのだろう。

そんな私が、階段から落ちる直前まで読んでいた中華風ファンタジー小説『青龍の女帝 玲玉記』の世界に転生したことに気が付いたのは、今から一年ほど前のことだ。小説『玲玉記』の主人公は、青龍国のお隣にある玄龍国の公主・夏玲玉。

彼女は姉の身代わりとして青龍国の前の皇帝の妃となり、その後、女帝を目指す。祖国である玄龍国の王族にしか操ることができないといわれる呪術を使い、自身の野望の邪魔となる者を次々に蹴落として、成り上がっていく。

それが、玲玉記の物語だ。

残念ながら前世の私は、玲玉記を読み終わる前に命を落とした。玲玉が青龍国の女帝となったのか、はたまた夢やぶれて青龍国を去ったのか——今の私には、この物語の結末を知る術はもうない。

（でも、もはや玲玉記の結末なんて知らなくても構わないわ。今、この世界で私が守るべき未来は、別にあるんだから！）

実は私には、この小説を大いに愛する理由があった。

玲玉記の世界に転生したことを悟った私が真っ先に思い浮かべたのは、夏玲玉にとっての敵役である青龍国皇帝・青永翔、そしてその後である鄭玉蘭のことだった。

永翔と玉蘭は、青龍国の実権を握ろうとした皇太后・夏玲玉によって殺されてしまう。生まれ変わっても一緒になろう、と誓い合って息絶える二人を描いた場面は涙が出るほど美しく、私はこの二人のことが大のお気に入りだった。前世の言葉で表現するならば、いわゆる推しである。

せっかく玲玉記の世界に生まれ変わったのだから、二人の恋を応援したい。

玲玉によって引き裂かれることなく、添い遂げて幸せになってほしい。

そう考えた私は、彼らを夏玲玉の魔の手から守るため、玲玉記の舞台となる青龍国後宮に入ることに決めた。

（私の花鉦の力を使えば、青永翔と鄭玉蘭を守れると思ったのよね。まあ、そう簡単にはいかなかったけれど……）

今世の私には、不思議な力が備わっていた。額に花鉦の形のアザがあり、そのアザの力で毒を浄化することができたのだ。

その力を使えば、自分の体に摂取してしまった毒だけではなく、触れた相手の毒までも浄化することができる。人を死に至らしめるような強毒から軽い風邪まで、花鉦のおかげでなんだって癒すことができた。

これなら、皇帝陛下である青永翔のお毒見係を務めることができる。皇太后の地位に上り詰めて青龍国を牛耳る夏玲玉が、いくら彼の命を狙って食事に毒を盛ろうとも、

私が側にいてその毒を浄化すればいい。

そのために私は、幼い頃から武道や学問を教わっていた曹侯遠先生の養女となり、後宮入りを果たした。

（後宮入りする前から知っていた侯遠先生の知人——翔永様の正体が、青龍国皇帝・青永翔だったことには驚いたけど）

玲玉記において、青永翔と鄭玉蘭は灯華祭という皇都の祭りです。初めて出会うことになる。無数の天燈が舞う夜空の下で、青永翔が鄭玉蘭を見初めるといふ展開だ。

二人が恋に落ちる瞬間を実際に見たかった私は、いそいそと灯華祭に出かけた。しかしその日は玉蘭を見つけることはできなかった。

代わりに「翔永」と名乗る男性と出会ったのだが、なんとその翔永様の正体が、青龍国皇帝・青永翔だったのだ！

入内して、翔永様……もとい、永翔様の側に来られたことは良かったものの、後宮妃が厨房に足を踏み入れて毒見をすることは許されなかった。

お毒見係として後宮に入るのに、厨房に入ることを禁じられては元も子もない。だから私は永翔様やその側近である商儀様と申し合わせ、皇帝の寵妃を装うことにした。永翔様が毎晩私の暮らす馨佳殿に通い、私はお毒見係として彼と食事を共にすることになったのだ。

私が花鉦の力を使って毒見をしていることを皇太后に悟られないよう、永翔様はそのまま朝まで馨佳殿で過ごし、あたかも私が寵愛を受けているように見せた。

（初めは仮初の寵妃となる約束だったのに、結局私はお毒見係という役目の枠を超えて、本気で永翔様に恋をしてしまったんだけど……）

私が入内したあとも、皇太后の謀略は続いた。

皇太后は、永翔様の実の母である楊淑妃に冤罪をかけ、皇統から除名しようと謀っていたのだ。

皇太后は永翔様の摂政として、青龍国の実権を握っている。しかし、永翔様が冠礼の儀を終えて正式に成人として扱われるようになれば、摂政としての彼女の役割は終わる。その前になんとかして、永翔様の力を削ぐとしたのだらう。

私と永翔様は力を合わせ、青龍国重鎮の官吏である蔡雨月やその娘の蔡妃の協力を得た上で、楊淑妃の除名を阻止することができた。皇太后の謀略を、上手く退けたのだ。

そしてその過程で、私は今世で失っていた幼い頃の記憶を思い出すこととなった。私の今世での本当の名は、明凜ではなく琥珀。

養父だと思っていた曹侯遠先生は、私の実の父親だった。

その上、まだ私が曹琥珀として生きていた幼い頃、皇宮を離れて曹家で療養してい

た永翔様とは、幼馴染という間柄だった。私が明凜として入内するよりもっと前に、私たちは既に出会っていたのだ。

（あの頃、永翔様は六歳、私は四歳。前世では推しだった永翔様が、まさか今世では私の幼馴染だったなんてね……今でも信じられないわ）

あのまずっと変わらず幼馴染として過ごせていたら、どんなに良かったらうかと思う。しかし実際の私たちは、とある悲しい出来事によって一度引き裂かれることになった。

ある夜のこと。私と永翔様は大人の目を盗み、皇都で行われていた祭りに出かけた。護衛も付けず、幼い子ども二人だけで夜の皇都に繰り出すなんて、今考えれば随分と無謀なことをしたものだ。案の定、永翔様はそこで刺客に命を狙われることになった。

永翔様に向けて放たれた毒矢に気付いた私は、咄嗟に身を投げ出して彼を庇った。そのまま背中に毒矢を受け、幼い永翔様の目の前で、私は一度命を落としたのだ。

私がその場でこと切れた後、永翔様は護衛によってすぐに皇宮に連れ戻されたという。

（幸か不幸か、私はその後、幽鬼に命を救われたのよね）

幽鬼は人の記憶を食べるといわれている。私は幽鬼に曹琥珀としての記憶を差し出

し、その代わりに、毒を浄化するための花鉦を授けられた。

その花鉦の力によって、毒矢から私の体に回った毒は浄化された。

しかし息を吹き返した私は、幽鬼に記憶を差し出したことで、曹琥珀としてのすべてを忘れてしまった。もちろん、大好きだった幼馴染の永翔様のことも。

琥珀から明凜に名を変え、父の友人である黄夜白に引き取られた私は、その時から黄明凜として生きることとなった。

（後宮に入って私の記憶を奪った幽鬼と再会し、そして彼女を救ったからこそ、こうしてまた永翔様のことを思い出して一緒にいられるのだけど……）

前世では推しとして崇め、今世ではその相手に恋をした——私はどれだけ永翔様のことが好きなんだろう。今の私の心の中では、目の前にいる幼馴染の永翔様を愛おしく思う気持ちと、推しとして遠くから応援したい気持ちが、複雑に入り混じっている。私が後宮入りしてから、もうすぐ季節が一回りしようとしている。けれど、長い時間をここで過ごしても、自分の今の境遇が現実のものなのかどうか、時々分からなくなる。

玲玉記には、琥珀や明凜という名の登場人物はいなかった。永翔様に幼馴染がいたという出来事も、書かれてはいなかったはずだ。

ここは間違いなく玲玉記の世界ではあるが、私の知っている玲玉記とは、少し展開

が変わってきている。本来はとつくに入内しているはずの鄭玉蘭が、まだ後宮に現れていないのがその証だ。

（玲玉記に書かれた展開が変化したのは、悪いことじゃない。皇太后に殺されるはずだった永翔様と玉蘭の命を救えるかもしれないんだし）

推しの二人には、絶対に幸せになってほしい。

二人を幸せにするために、私はこの後宮で生きていくと決めたのだ。

牀榻から体をのっそりと起こした永翔様に気付き、私はお茶の準備を始める。

「……明凜、おはよう。今朝は随分と冷えるな」

「おはようございます、永翔様。雪も降っているんですよ。でも、そろそろ諦めて起きてくださいね。冠礼の儀の準備でお忙しいんでしょう？」

「ああ、今日も仕事如山積みだ」

牀榻から下りて火鉢の前の榻に座ると、永翔様は上衣の襟を深く合わせて寒そうに背中を丸めた。

幼い頃から皇太后に命を狙われ、たびたび食事に毒を盛られてきた永翔様。目の前で自分の毒見役が亡くなるのを何度も目の当たりにするうちに、永翔様は毒見を拒むようになった。

いつしか食事をする事と自体が怖くなったのだろう。永翔様は大人になった今でも食が細い。そのせいか体も弱くて、頻繁に風邪をひく。

（私が入内した頃に比べれば、随分お元気にはなられたけど……）

花鈿の力を持つ私は、永翔様のお毒見係として適任だった。万が一私が毒を摂取してしまっただとしても、その毒を浄化する時に花鈿がほんのり熱くなって気付くことができるからだ。しかし残念ながら私の額の花鈿は、今ではすっかり消えてしまっている。

毒を浄化する力も、失ったままだ。

「永翔様、お茶を淹れました」

「ありがとう。毒見は不要だ」

私がお茶に口を付けようとしただけで、この反応だ。

（茶器も茶葉も子琴が厳重に管理してくれているから、毒を仕込まれる心配はないと言っているのに）

穏やかそうに見えて、永翔様は意外と頑固なところがある。ここで「毒見をさせてほしい」と食い下がったところで、頑なに断られるに決まっている。私は永翔様に言われた通り、毒見を止めてお茶を差し出した。

温かいお茶を口にして一息ついた永翔様の隣に、私も並んで座る。

腕と腕が触れ合うほどの至近距離にいる推しの顔は、寝起きにもかかわらず今朝も素敵だ。

「それにしても、永翔様。楊淑妃の皇統除名を阻止した一件のあと、皇太后陛下には何も動きがありませんね」

「ああ。私の冠礼の儀の準備もつつがなく進んでいる。皇太后なら必ず横槍を入れてくると思っていたのだが……朝議にも出て来ず、玄龍国出身の官吏を名代としてやるよ」

「最近には宮に籠りきりで、ほとんど外出もなさらないとか。今がチャンスですよ、永翔様！」

「ちゃん、すう……？」

「あっ！ ええつと……絶好の機会、と言いたかったのです」

（危ない危ない！）

少し気を抜くと、つい前世での言葉が口をついて出てきてしまう。

その場を取り繕おうと、私はすぐ側にいた黒猫の珠を抱き上げて背中を撫でた。

「明凜。絶好の機会とはどういうことだ？」

「皇太后陛下がこれまでどのようにして永翔様に毒を盛っていたのか、今のうちに調べるんです。玄龍国王家に伝わるという呪術を使つたのであれば、その呪術の正体

を探りましょう」

「呪術か……先日の清翠殿での一件を考えても、皇太后が呪術を使って私に毒を盛っていたことは間違いないだろうな」

強張った表情で目を伏せる永翔様の言葉に、私も黙って頷いた。

清翠殿の一件というのは、数か月前に後宮で起こった幽鬼出沒事件のことだ。

前の皇帝の妃嬪で、何年も前に亡くなった陶美人が幽鬼となり、夜な夜な清翠殿に現れるようになったのだ。そして、その清翠殿に近付いた宮女の一人が不審な死を遂げた。

（誰もが、宮女は幽鬼に殺されたと思ひ込んだのよね。でも、実際は違った）

実はその時、清翠殿には人知れず強力な呪術がかけられていたのだ。青白い光が殿舎の周りを囲っており、その光に触れた者をたちまち毒で侵す、という呪いだ。

公には伏せられていたが、亡くなった宮女の死因も、毒だった。

四龍と呼ばれるこの大陸の四国の中で、呪術を使えるのは玄龍国の王族のみだと言われている。つまり清翠殿に呪術を張り巡らせたのは、この青龍国後宮に出入りできる玄龍国出身者——皇太后・夏玲玉であるとしか考えられない。

しかし、清翠殿に呪術がかけられていたこと目の見える証拠がない以上、皇太后を宮女毒殺の罪に問うことはできなかった。

（花鉦の力があつたからこそ、呪術による毒を浄化して、あの一件を解決することができたのだけ……）

珠珠の背中を撫でるのを止め、その手で花鉦があつた額に触れてみる。  
やっぱり今はなんの変哲もない、ただの額だ。

「永翔様。ちょうど今、曹侯遠先生を長として、青龍国の史書を作るための準備が進んでいますよね？ 永翔様が新設した史館に四龍各国から文献が集まっているところですよ。玄龍国王家に伝わる呪術に関する書物も、史館を探せば見つかるかもしれません」

「確かにそうだな。曹侯遠に話を聞いてみるか」

「永翔様は冠礼の儀の準備でお忙しいですから、私が代わりに調べます。侯遠先生にもお会いしたいですし」

「……いや、それは危険だ。もしも皇太后が明凜の動きを知ったら、何をしてくれるか分からぬではないか」

「だからこそ、皇太后陛下が大人しい今のうちに動くのです。それに、今は冠礼の儀のために四龍各国から人や物が大挙して青龍国に押し寄せています。この混乱に乗じれば、私が変に目立つこともないかと」

「しかし……」

永翔様の心配性は今に始まったことではないが、毎度ここまで心配されると、私も骨が折れる。

私は隣にいる永翔様の腕に手を絡ませ、彼の肩にそっと寄りかかった。永翔様もそれに応えるように、私の頭に頬をすり寄せる。

毒見をするなどか、一人で動くのは危険だとか。

その言葉が私の身を案じているからこそのものだということを、私もよく分かっているつもりだ。

でも、永翔様はご自分一人でも抱えすぎる。

信頼されていない、とは思わない。ただ、私は早く永翔様の心の重荷を下ろしてあげたい。

過去には、子どもの頃の私を毒矢で亡くし、母の楊淑妃を病で亡くした。その上、皇太后からたびたび毒を盛られたことで、永翔様のお毒見役たちも次々に命を落とすこととなった。

それらの死をすべて、自分のせいだと思っている永翔様の心の傷の深さは計り知れない。

（永翔様に落ち度なんて、何一つないのに……）

彼の心の傷が本当の意味で癒えるまでの間は、私のことを心配してくれるなどと言っ



でも無駄だろう。

その代わり、せめて馨佳殿を訪れた時くらいは心穏やかに過ごしてほしい。そのために私ができることがあれば少しでも手伝いたい。

……そう思っているというのに。

「私が侯遠先生に頼んで、呪術じゅじゆつについて調べます」

「駄目だ」

私たちは、しばらく押し問答を続けた。

永翔様がようやく折れたのは、朝餉あさげを食べ終わる頃のことだった。

「いいか、明凜。史館で何かあればすぐに商儀に助けを求めろんだ。それと、夕刻までには必ず馨佳殿に戻ることに。最近、市井せいで病が流行っているから、曹侯遠以外の者とはできるだけ距離を置いて……」

永翔様の話は終わらない。この調子では、夕餉ゆうげの頃には「やはり危険だから史館に行くのはやめろ」と言い出しかねない。

侯遠先生に会いに後宮こうきゆうを抜け出すなら、今日しかない。

「はいはい、永翔様。全部分かっていますから！」

心配症の永翔様を笑顔にしたくて、私は両手の指でハートマークを作ってみせた。前世でよくやっていた、ボディランゲージだ。

「明凜。なんだ？ その手は」

「これは、心形ハートと言って、愛情を表す形です」

「愛情……？」

「そうです！ 私と永翔様の間の、愛。可愛い形でしよう？」

ハートマークを作った指を、永翔様の胸に押し当てる。照れくさそうにふっと笑った永翔様を見て、私もなんだか幸せな気持ちになった。

「さあ、永翔様。早く行かないと朝議に遅れますよ」

朝餉あさげを終えた永翔様を、いつものように馨佳殿から送り出す。

後ろ髪を引かれるように、何度もこちらを振り返りながら出て行く永翔様を、殿舎の外に出て見送った。

私の腕の中で微睡まどろんでいた黒猫の珠珠は、外の空気の冷たさに不機嫌な声でにやあと鳴いた。



この大陸には青龍国のほかに、玄龍国、赤龍国、白龍国はくりゆうこくがあり、これらをまとめて四龍と呼ぶ。

四龍を統べるのは青龍国で、古来よりその他の三国は青龍国皇帝の臣下という立場だ。

つまり、永翔様は四龍の頂点に君臨する天子。

成人を祝う冠礼の儀が終われば名実ともに、大陸で最も尊い存在となる。

（そんな永翔様の寵愛を受けたと考ええる人が大勢いるのは分かる。でも、さすがにこれは想像以上だわ……！）

侯遠先生に会うために、男装して後宮を抜け出した私の目の前には、驚きの光景が広がっていた。

青龍殿の門前にひっきりなしに到着する馬車の列は、最後尾が見えないほどに長く続いている。馬車からは美しく着飾った女性が次々に降りてきて、門の前に集まっていた。

青龍国だけではなく、赤龍国や白龍国の襦裙を身に付けている者もいるが、多くが私と同年代くらいの若い女性たちだ。化粧と匂い袋の香りが混じり合ったその場の空気に、私は思わず袖で口元を覆った。

しばらくすると彼女たちは宦官に誘導されて門の前に一列に並び、しゃなりしゃなりと青龍殿に向かって歩いて行った。

「商儀様。もしかしてあの方たちは、これから後宮に入って皇帝陛下の妃嬪となるの

ですか？」

「まあ、そうなりますね。青龍国の皇帝たるもの、やはり世継ぎは必要ですから。ただ、陛下が一番大切になさっているのは曹妃です。そこはご安心を」

「玉蘭があの中にいたりして……」

「曹妃。自分で質問をしたくせに、私の話聞いてます？ 玉蘭とは誰ですか？」

「え？ 玉蘭というのは……っと、失礼しました、なんでもありません！ 商儀様、さあ早く行きましょう」

青龍殿に背を向けて、商儀様の背中をぐいぐいと押す。

わざわざ男装までして後宮を抜け出したというのに、ここで商儀様に変に勘繰られては面倒なことになる。

（本音を言うと、内心では玉蘭のことが気になって仕方がないんだけど……）

新しい妃が入内するのはいつぶりだろうか。永翔様が彼女たちに目を向けるとは思っていないけれど、もしもあの中に玉蘭がいたとしたら話は別だ。

私は心の底から、永翔様と玉蘭の恋を応援できるだろうか？

幼い頃から大切に想っている永翔様の幸せを願い、笑顔で身を引けるだろうか？  
チクチクとした胸の痛みを隠すように、私は両腕を組んで体に寄せた。

史書の編纂や保管のために新たに設けられた史館は、皇宮の南西の端にある。後宮から見ると、政の中心となる青龍殿を挟んでちょうど反対側にあたる。

後宮の妃嬪は本来、無断で後宮を出ることは許されていない。なるべく人目に付かないように遠回りして後宮を抜け出したので、ここまで来るのに想定よりも時間がかかってしまった。後宮を出た時点で午時を過ぎていたから、急がなければあつと言う間に日暮れを迎えてしまう。

周辺では多くの荷車が行き来し、真新しい史館の入口へ、荷が次々と吸い込まれていく。

（すごいわ！ 侯遠先生が史館の長となつてから間もないのに、もうこんなにたくさん書物が皇都に集まってくるなんて！）

これだけの量の書物があれば、玄龍国の呪術に関するものも見つかるのではないだろうか。思いがけない状況に、期待で胸が膨らんだ。

隣にいる商儀様もこの光景を初めて見たようだ。人と荷の多さに圧倒されて、「ほう」と感心したように辺りを見回している。

「曹侯遠殿には頭が上がりません。官職復帰は本意ではなかったでしょうに、皇帝陛下のためにここまでしていただけるとは……。これもすべて、曹妃のおかげですよ」

「そんな、私は何も。侯遠先生は隠居してからもずっと、永翔様のことを気にかけて

らっしゃいましたから。永翔様のご人徳です」

「いえ。陛下が前を向くことができたのは、曹妃の存在があったからこそです。あなたは仮初の妃ではなく、本当の意味での後宮妃になりました。ですから、私のことを商儀様と呼ぶのはおやめください」

「商儀様……ではなく、商儀と？」

今さら商儀と呼ぶのは気恥ずかしい。照れ隠しで肩をすくめながら微笑むと、調子には乗らないでくださいね、と釘を刺された。

「それにしても……あまり良い状況とは言えませんね。最近、原因不明の病が流行っていますね。これだけ人の行き来が多いと、病が変に広まらないか心配です」

「そう言えば永翔様も、市井で病が流行っていると仰っていました」

先ほど青龍殿の側で目にした妃嬪たちも、史館の前で慌ただしく書物を運ぶ役夫たちも、青龍国だけではなく四龍の至るところから皇宮に集まってきている。人の移動が多く、また長くなるほど、それだけ病が広がるのも早くなる。

「まだ皇宮内では病にかかった者はいませんが、念のため曹妃もお気をつけて」

そう言って商儀は私の背中を押した。

侯遠先生はこの奥の房室にと言う。私は慌ただしく荷を運ぶ役夫の間を縫って、侯遠先生の元に向かった。

「先生、お久しぶりです！」

山のように書物が積み上げられた長床凡ながづくえの向こうに侯遠先生の姿を見つけ、声をかける。振り返った先生は男装した私の姿に一瞬ぎょっとしたものの、すぐに返事をしてくれた。

「驚いた、まさか明凜が訪ねて来てくれるとは。元気にしていたか？」

「はい、お会いするのは何か月ぶりでしょうか。寒い日が続いていますが、風邪など引いていませんか？」

「見ての通り、毎日書物に囲まれて忙しいが元気にしているよ。それはそうと明凜、ここまで一人で来たのか？ 後宮こうきゅうを出る許可は？」

「私が先生を訪ねることは永翔様もご存じです。この房室へやの前までは商儀と共に来たのですが、私たちの話に邪魔が入らないように人払いをしてくれています」

「そうか。では明凜、私を父と呼んでくれないのか？」

小声でそう言うと、侯遠先生は立ち上がって両腕を広げる。

私もそれに応えて、先生の腕の中に飛び込んだ。

「お父様！」

「明凜……今は琥珀と呼んでもいいかな？ 元氣そうで何よりだ」

髪を優しく撫でながら、お父様は私の本当の名を呼んだ。

「お父様。永翔様が、いつか必ず私を曹琥珀に戻すと言ってくれています」

「そうか。その日が待ち遠しいよ。だが、焦りは禁物だ。皇帝陛下のお命を狙う者の正体が明らかになり、陛下の地位が安泰となるまでは、其方そなたは明凜として生きなさい」

「分かっています。それまでは、お父様のことは侯遠先生と呼びます」

お父様の肩の向こう、円窓の外では、役夫えきふたちが相変わらず次々に荷を運んでいる。冬は日が短いから、暗くなる前に仕事を終わらせようと急いでいるのだろう。この寒さだと今夜も雪になりそうだ。雪で荷が濡れてしまつては困る。

（私もあまり遅くならないように後宮こうきゅうに戻らなくちゃね。さてと、玄龍国の呪術じゆじゆつに関する書物はあるかしら）

お父様の腕から離れ、私はあたりに積まれた書物の山を眺める。

「……それにしても、すごい量ですね」

「ああ、四龍の王家に呼びかけて集めてきたからな。この中から必要なものを精査し、記された内容が真実かどうかを確認した上で、史書として纏めていくことになる。私一人では無理だから、人も雇わねばならん。気が遠くなるような仕事だよ」

「形になるまで、何年もかかるのではないですか？」

「すべて完成するまでにはそれくらいかかるだろう。だから、出来上がったものから

段階的に公表していく予定だ。私としては、できるだけ早く皇帝陛下にその地位を磐石にさせていただきたいと思っているからね」

そう言ってお父様は、長床几ながぶこの前の椅子に腰かけた。

青龍国の史書が完成すれば、初代青龍国皇帝の血を引く永翔様が四龍の正統な統率者であることが明文化される。

既に青龍の力を発現させている永翔様が四龍を束ねる立場であることに對して、今さら異論を唱える者はいないだろう。だが、それを文字として記しておくことに大きな意味がある。国を挙げて作った史館で正式な記録として残せば、簡単には覆せなくなるからだ。

史書が完成すれば、青龍国の官吏も民も皆、これまで以上に永翔様に忠誠を誓い、従うようになるだろう。

皇太后がいくら玄龍国出身者で周りを固めたとして、ここは青龍の地。青龍国の民心を得られなければ、皇太后が本当の意味で帝位に就くことはあり得ない。

（大丈夫よ。皇太后の野心のために、永翔様と玉蘭の命を危険に晒さらすようなことはさせない。永翔様が名実ともに皇帝となるために、今のところはすべて順調に進んでいるわ）

私は改めて、書物の山を見渡した。

これだけの書物があれば、玄龍国だけでなく赤龍国や白龍国についても深く学べそうだ。

皇太后の陰謀を阻止するためには、知識はいくらあってもいい。これからしばらく書物を読むのに忙しくなりそうだと予感しながら、私は側に積んであった書物の中から、目に着いたものを一冊手に取った。

何枚か頁（ページ）を繰るが、玄龍国に関する記載はすぐには見当たらない。

（私一人では、どの書物を読んだらいいか選べないわね）

「お父様。私、四龍の王族の歴史を知りたいのですが……」

玄龍国の呪術（じゆじゆ）について知りたい、というのが本音だが、それを伝えればお父様も永翔様と同じように私のことを心配し始めるだろう。お父様まで深く巻き込むことのないよう、詳しい話は伏せておきたい。

「四龍の王族に關しての書物ならいくつかあるはずだが、一体なぜ？」

「私も永翔様の妃として、四龍について学んでおきたいと思っています。少しお借りして帰っても？」

「そうか。一人で学ぶのは大変じゃないか？」

「大変かもしれませんが、頑張ります。何かが起こった時に、永翔様の一番近くにいたのは私です。できるだけこのことは準備しておきたくて」

「……お前の頼みなら仕方がない。何か事情があるんだろう?」  
「はい……」

「分かった。四龍の中でも国によって言葉が異なったり、古語で書かれていたりするから、まずは読みやすい簡単なものを持って帰るといい」

お父様は立ち上がり、書棚の中から何冊かの束を手にとった。

手渡されたのは昔話や、四龍の風土について書かれたものだった。  
中を開くと、図も記してあって分かりやすそうだ。

「ありがとうございます、読み終わったらすぐにお返しに来ますね」

「ああ、また会いに来てくれ。そう言えば、後宮に妃嬪が増えると聞いたのだが……大丈夫か?」

お父様は気まずそうな表情で言った。

幼い頃から永翔様のことを好きだった私が、ほかの妃嬪の入内で心を痛めていないかと心配してくれているのだろう。

「お父様、心配しなくても私は大丈夫です」

「それならいいんだが……冠礼の儀に合わせて、後宮妃も正式に封号を与えられることになる。もしもお前がゆくゆく皇后への冊立を目指すなら、四妃となっておいたほうがいい」

お父様は私の反応を探るようにこちらを見た。

四妃というのは貴妃、淑妃、德妃、賢妃の四つの位のことだ。

青龍国の後宮において四妃は特に身分が高く、それ以外の妃嬪とは扱いが異なる。

四妃となるには生家の身分の高さが少なからず影響するし、妃嬪本人も高い封号を賜る分、それ相応の品格や見識を求められる。

ただし、皇帝の寵愛が深ければ、例外がないとは言いが切れない。

青龍国においても、過去には皇帝に見初められた商人の娘が入内し、とんとん拍子に四妃まで駆け上った例があると聞いたことがある。

玲玉記では、鄭玉蘭は皇后として登場した。

青龍国の官吏の中に鄭という姓の者は思い当たらないから、もしかしたら玉蘭は、入内後に皇帝の寵愛によって皇后の位まで上り詰めたのかもしれない。

なんと言っても二人は、灯華祭の天燈の明かりの下で、出会った瞬間に一目惚れするほどの関係なのだから。

(いずれにしても、私に四妃の位は不要だわ。玉蘭さえ無事に皇后になってくれれば、それでいい)

少し考えて、私は首を横に振った。

それを見たお父様は寂しそうに苦笑する。

「本当にいいのか？ 其方そなた以外の妃が皇后になるのを、側で見守ることになるかもしれないが」

「お父様。私は高い位なんかよりも、永翔様の幸せを望んでいるんです。別の方が皇后となるのが永翔様にとつての幸せなら、私はそれで構いません」

「……そうか。琥珀、もしも後宮こうきゆうが嫌になったのなら曹家に戻ってきてもいいんだぞ。皇帝陛下には、私たちのほかにも多くの味方ができた。何もお前が後宮こうきゆうで危険を冒してまで陛下をお守りしなくとも、官吏の中には蔡雨月もいることだし……」

「私はまだまだ後宮こうきゆうで永翔様をお守りしたいと思っています。だから、しばらく曹家に戻るのには難しそうです」

心配そうな顔のお父様を元気づけるように、明るく微笑んでみせた。

私の唯一の武器だった額の花銅かどうはもうない。

万が一、永翔様が食事に毒を盛られ、それを私が毒見で食べてしまったとしたら、毒を浄化する力がない身では簡単に命を落とすだろう。

だからお父様の本心としては、私を後宮こうきゆうに置いておきたくはないのだ。

それでも私は、永翔様の側にいると決めている。永翔様と、これから現れる未来の皇后、鄭玉蘭を守るためだ。

(それに今頃、その玉蘭が入内じゅだいしているかもしれないし……ね？)

先ほど目にした大勢の新しい妃嬪ひひんたちは、永翔様への挨拶を終えて、そろそろ後宮こうきゆうに入った頃だろうか。

私は借りた書物を布で包んで小脇に抱え、史館に來た時と同じように幞頭ぼくとうを目深に被った。滅多に会えないお父様との時間が終わるのは名残惜しいが、夕刻までには馨佳殿に戻ると、永翔様と約束している。

お父様に別れを告げて、私は房室へやの外で待つ商儀の元に戻った。



(早く馨佳殿に帰らなきゃ。これは本格的に降り始めそう)

史館を後にしてしばらく歩くと、皇宮こうきゆうに小雪が舞い始めた。

商儀は早く早くと私を急せかし、後宮こうきゆうを目指して小走りに進む。

日が落ちれば、官吏たちは仕事を終えて一斉に帰路に着く。その人波に巻き込まれて誰かに見つかっては、面倒なことになる。

「曹妃がのんびりしすぎるからですよ！ 妃がこっそり後宮こうきゆうを抜け出したことが広まれば、ただではすみません。それに、皇帝陛下が馨佳殿を訪れた時に曹妃がまだ戻っていないかったら、怒られるのは私なんですからね！」

「申し訳ありません！ でも私、もう息が切れて走れない……！ ちょうどここは青龍殿の目の前ですし、商儀は青龍殿に行つて、永翔様を上手く足止めしてくれませんか？」

「曹妃はどうするんです？ ここから一人で後宮に戻ると？」

「はい。後宮に入る抜け道も分かっていますし、着替えを隠した場所も覚えていますから、一人でも大丈夫です」

「……仕方ないですね。そうしましょう。とにかく急いでくださいね！」

「分かっています！ では、永翔様の足止めをよろしくお願いします！」

私の返事を最後まで聞かず、商儀はもう青龍殿に向かって走り始めている。忙しい日に私の我儘に付き合わせてしまったことを、心の中で商儀に向けて謝った。

雪が降るほどの寒さだというのに、商儀に追いつこうと必死で走ったせいで体が熱い。変装のために身に着けた男物の袍の下には、じんわり汗をかいていた。お父様から借りた書物も思いのほか重たくて、後宮への抜け道に辿り着いた頃には疲れ切つてくたくたになっていた。

（あつたあつた、ここから後宮に戻れるわ）

鬱蒼とした木々をかき分けて進むと、その奥の壁に、後宮に通じる古い隠し扉がある。

ここを通れば、誰も使っていない無人の殿舎の裏手に出る。その殿舎の柱の陰に、私の襦裙を隠してきた。

ひっそりと着替えを済ませたら、何食わぬ顔で馨佳殿まで歩いて戻ろう。

今日のお忍びの外出については子琴とも申し合わせてあるから、「散歩をしてきた」と言えば、侍女たちをごまかすことができそうだ。

音を立てないようにそっと隠し扉を開き、息を潜めて後宮内に足を踏み入れる。茂みの間を抜けて視界が開けたところに、殿舎に上がる数段の階段が見えてきた。

周囲を軽く見回しても、誰もいない。

私はその階段を素早く駆け上がる。

着替えを隠した柱の裏で身をかがめながらも一度あたりを窺うと、これまでは誰も使っていなかったはずの隣の殿舎に灯りがゆらゆらと動くのが見えた。

（あれだけ大勢の妃が入内したんだもの。空いていた宮が皆に割り振られたに違いないわ。もしかしたらここも……）

誰かに見つかる前に、急いで着替えを済ませなければ。

柱の陰にあった襦裙に慌てて手を伸ばすと、その手と反対の小脇に抱えていた書物の束がずるっと滑り落ちた。

「あつ、雪で濡れちゃう……！」



書物をまとめていた布の包みの結び目が、階段を滑り落ちながらはらりと解けた。小雪が舞う中、包みの中身がバラバラになって階段を滑り落ちていく。咄嗟に手を伸ばした先、階段から数歩ほど離れた木の陰。つい先ほどまでは誰もいなかったはずのその場所に、黒い人影のようなものが動いた。

「……落としましたよ？」

木の向こう側の暗闇の中から、透き通った高い声が響く。

（しまった、誰かいるわ！）

青龍国の後宮には、当然のことながら、男性は入ることができない。皇帝と宦官、太医くらいしか入ることを許されていないこの後宮で、この男装姿を見られたら、大騒ぎになってしまうかもしれない。

私は急いで男物の幘頭を脱ぎ捨て、結び上げていた髪を下ろした。

階段を上がってくる相手の視線から逃れるように、柱の陰に身を屈めて顔を伏せる。

「この書物、あなたのものではありませんか？」

「……」

「あら、どうなさったの？ 大丈夫？」

高い声の女性はその場にしゃがみ込み、柱に隠れた私の顔を下から覗き込む。

間近で彼女と目が合って、私は言葉を失った。

遠くの明かりにぼんやりと照らされたその女性は、こぼれ落ちそうなほど大きな瞳で真つすぐに私を見ている。結び上げた黒髪には、蝶を象つた銀の簪。小さな珠で飾られた步揺が、冬の寒風に揺れて透き通った美しい音を立てた。

（絶世の、美女……）

突然目の前に現れた美女の姿に目を奪われてぼんやりしていると、彼女は不思議そうに首を傾け、ばちばちと目を瞬かせた。

男物の袍を着て、長い髪をまとめもせずに風に揺らす私の姿は、さぞや滑稽に見えるだろう。

案の定、彼女は困惑した様子で恐る恐る口を開いた。

「あなた、宦官なの？」

「いえ、そういうわけではなく……申し訳ありません。すぐに出て行きますからご安心ください。拾っていただきありがとうございます」

美女の持つ書物を受け取ろうと、両手を差し出す。

「これは四龍の昔話を集めたものよね。とても懐かしいわ」

私に手渡す前に、彼女は大きな瞳で手元の書物をまじまじと見つめた。

「……懐かしい？ それを読んだことがあるのですか？」

「ええ、私は玄龍国から来たから。玄龍国の昔話は、子どもの頃に父に何度も読んでもらったわ」

美女はにつこりと微笑んで、それから私の両手の上に書物を載せる。

（ああ、なるほど。やはり今回は青龍国だけではなく、四龍の各国から妃嬪を迎えたのね。この方は皇太后と同じ、玄龍国出身の妃嬪なんだわ）

私が男装してこんな場所に一人でいることも、青龍国にまだ慣れていない彼女にとつては、さほど不思議なことではないのかもしれない。

取り乱さず落ち着いた様子で微笑む彼女の姿に、私も安堵して胸を撫でおろした。

騒ぎにはならず、無事に馨佳殿まで帰れそうだ。私は美女から受け取った書物をもう一度包み直し、隠してあった襦裙と共に胸に抱えた。

しゃがんだ姿勢から立ち上がると、それに合わせて彼女もゆつくりと立ち上がって私にもう一度笑顔を見せる。

（やっぱり、お綺麗な方）

これほどまでの美女は、後宮の中でも見たことがない。妖艶な美しさと、天真爛漫で親しみやすい雰囲気をも両方とも兼ね備えている。

それに、銀でできた簪はとても豪華で、裕福な家でなければ手に入らない高価なものに見える。

きつと彼女は玄龍国でも地位のある家の娘か、そうでなくても、良い後見人が付いているのだろう。

「ねえ、あなたは誰に仕えているの？ 今日は大勢の妃嬪が入内したから、道に迷ってここに来てしまったの？」

「いえ、大丈夫です。私は馨佳殿のほうに戻ります」

「馨佳殿？ それはどこかしら。私も今日入内したばかりで、道案内ができず申し訳ないわね」

「とんでもありません！ 一人で戻れますので。夜半に大変お騒がせしました」

彼女の美しさに見惚れてつい長居をしてしまったが、いつまでもここで時間を潰しては、永翔様の訪いに間に合わなくなる。

私は大きく頭を下げ、彼女の横をすり抜けて階段を駆け下りた。

（こんな格好だけど、着替える場所もない仕方ないわ。このまま馨佳殿に帰ろう）  
闇に包まれた後宮の中を男装姿で走り抜け、私が馨佳殿に到着すると、何やら中が騒がしい。侍女たちが私の不在を心配して、騒ぎ始めているようだ。

雪と泥で汚れた男物の袍を身に付け、髪を振り乱して息を切らせた私を、馨佳殿の侍女たちは悲鳴を上げながら迎えるのだった。

「子琴、陛下はまだかしら。せっかく準備してくれた夕餉ゆうけが冷めてしまうわね」  
 今夜は永翔様の好物を色々と用意したのに、当の本人がいつまで経っても馨佳殿に現れない。

（きつと、私が商儀に永翔様の足止めを頼んだからだわ。頑張つて青龍殿に引き留めてくれているのかも）

私が後宮こうきゆうを抜け出したばかりに、侍女や商儀に手間をかけさせてしまった。心苦しく思いながら、私は殿舎でんしゃの外に出て夜空を見上げる。

先ほどまで散らつく程度だった雪は、段々と強さを増している。青龍殿から馨佳殿まで移動するだけでも大変なのに、この寒さと雪では尚更だ。

「永翔様が風邪を引いてしまわないか心配だわ」

「そうですね。ささ、明凜様も早く中へ。皇帝陛下がお越しになるのに合わせて、お食事を温めなおすように致します。それにしても今夜は遅いですよね。皇帝陛下も冠礼かんれいの儀の準備でお忙しいのでしょうか」

「そうね。忙しくてお疲れだからこそ、しっかりお食事をしていただきたいのだけど……」

羹かうの入った器を下げて出て行く子琴と入れ替わりに、最近新しく侍女となった白容はくようが入ってきて、私の前に跪ひざまずいた。

「曹妃。皇帝陛下より、今夜は遅くなるため先にお休みになつてほしい、とのお言伝ごんでんでございます」

「まあ……やはりお忙しいのね。白容、陛下がどれくらい遅くなるか聞いている？ ちょうど読みたい書物もあるから、少しくらい遅くなつても待てるのだけど」

「あの、どうやら今夜は……えつと……」

「どうしたの、白容。早く教えてちょうだい」

「……申し訳ございません！ 本日は新しい妃嬪ひひんの入内じゆだいが多くあり、そちらの対応で手いっぱいだそうです！」

報告を終えた白容は、そのまま床に叩頭こうとうして肩を震わせた。

（新しい妃嬪ひひんの対応で手いっぱい？ 永翔様が？）

確かに、史館しかんに向かう途中で青龍殿の門の前に多くの妃嬪ひひんたちが並ぶのを見た。永翔様は、あの方たち一人一人に対面しているのだろうか。

私が初めて後宮こうきゆうに来た日、青龍殿で再会した永翔様は、私に興味のかけらもない様子だった。曹明凜という名前を聞いて、初めてこちらを振り向いたくらいだ。

やはり鄭玉蘭以外の女人には全く興味を持たない人なのだと、妙に納得したような記憶がある。

（それなのに……今回はどうして？）

動揺していることを悟られないよう、私は白容に手を差し出して立ち上がらせた。「白容。あなたが何をしたわけでもないんだから、そんな顔をしないでちょうだい」「でも、曹妃……」

「こんな季節に冷たい床に跪いたら、風邪を引くわ。今日はもう下がっていいから、ゆっくり休んで」

白容を房室から送り出し、誰もいなくなつたのを確認して、私は小上がりになった炕の上に腰を下ろした。

炕の下には竈の焚口から引いた煙道を通してあり、床暖房のようになっていた。今季節でも暖かいこの場所は、寒がりの永翔様のお気に入りだ。

香を脱いで炕に上がり、壁に背を預けて両膝を抱える。

ここ青龍国では、人前で足を見せることはあまり行儀の良いこととはされていない。だからこんな格好をするのは、誰も見ていない今だけ。いつも永翔様が座る定番の場所で、抱えた膝の上に自分の頭をだらりと預けた。

「あれだけ多くの妃嬪が入内したんだもの。いくら永翔様だって、無下に扱うわけにはいかないわよね」

後宮嫌いで知られる永翔様はこれまで、入内した妃嬪たちへの挨拶を顔合わせ程度で簡単に終わらせていた。

しかし、今回はこれまでとは違う。

永翔様が名実ともに青龍国皇帝として立つにあたり、四龍各国とは良好な関係を築いておきたい。皇太后率いる玄龍国出身の官吏たちの暴走に備えて、赤龍国や白龍国を上手く味方に取り込んだほうが得策に決まっている。

四龍のあちこちから集まった妃嬪たちを尊重してこそ、国同士の結束は強まる。

（だから今夜は、私のところに来られないくらいに、ほかの妃嬪たちに時間を割いているんだわ）

永翔様が心から愛する相手は、未来の皇后となる鄭玉蘭ただ一人だけだと決まっている。

それでも、曹琥珀として四歳の頃に永翔様と出会い、今も後宮で永翔様と共に過ごす私には、ほかの妃嬪たちとは違う特別な愛情を向けてもらえるのではないかと、心のどこかで期待していた。

玉蘭が癒すはずの永翔様の心の傷を、私なら代わりに癒すことができるんじゃないか。

永翔様にとって私は、玉蘭以上の寵妃になれるんじゃないか。

烏計がましくも、そんな風に考えたこともある。

実際はこうして、玉蘭どころかほかの妃嬪たちにすら敵わないのに。

（私ったら……幼稚な嫉妬は見苦しいわ）  
両膝を抱える腕にぎゅっと力が入る。

玲玉記の登場人物には、黄明凜という人も曹琥珀という人もいない。私一人だけが、この世界の部外者だ。

自分の立場をわきまえているつもりでも、時々こうして永翔様との距離を感じて切なくなる時がある。

（さつき出会った玄龍国からの妃、ものすごく綺麗な方だったな）

永翔様も、あの美女と対面してご挨拶しただろうか。

いくら後宮嫌いの永翔様だって、あれだけの美女に見つめられたら悪い気はしないだろう。

（むしろ、そのまま彼女の宮に足が向いて、今夜は共に過ごすなんてことも……）

嫌な想像ばかりが頭を巡る。

青龍国の皇帝という立場なら、むしろそれが普通だ。

後宮に住まう妃嬪は、誰もが永翔様のものなのだから。

「はあ……私らしくない。気持ち切り替えよう。そうだわ、侯遠先生に借りた書物を読まなきゃ！」

あの皇太后のことだから、必ずや永翔様の冠礼の儀を邪魔してくるはずだ。皇太后

が大人しく引きこもっている今のうちに、彼女が使う玄龍国の呪術の正体を突き止めておきたい。

書物を包んだ布の結び目を解き、一番薄くて早く読めそうな一冊を取り出す。

それは書物というよりも、黄ばんだ古い紙を無造作に紐で綴じた、冊子のようなものだった。破らないように慎重に頁をめくると、そこには簡条書きで文字が書き連ねられている。

「あれ……？ 例の玄龍国の美女は昔話だと言っていたけど、この書物はまた別物ね。なんだか、ただの目録って感じ」

織物、反物、装飾品、驢馬、羊……簡条書きで並べられたそれらの単語の羅列に、私は首を傾げた。

「これは、妃嬪が入内する時に持ち込んだ、持参品の一覧……ってところかしら」  
更に頁をめくって見れば、それぞれの持参品の項目の最後には、日付とともに妃嬪の名前らしきものが記されている。書かれた日付が正しければ、二十年近く前の記録のようだった。

「……ということは、前の皇帝、つまり永翔様のお父様の妃嬪についての記録ということになるわね。皇太后の名前もあるかしら」

皇太后——玄龍国の公主、夏玲玉。

青龍国に嫁ぐはずだった姉の身代わりとして、前の皇帝の妃となった悲劇の花嫁。しかし、一通り最後まで目を通してみても、夏玲玉の名は見つけることができなかった。

その代わりに見つけたのは、夏雪媛の名。

雪媛というのは確か、玲玉の姉の名ではなかっただろうか。だとすると、元々青龍国に嫁ぐはずだったのは、この夏雪媛のほうということになる。

（玲玉記に、玲玉が青龍国に嫁ぐ前の幼少期の出来事が書かれていたわよね。どんな内容だったっけ……？）

前世の記憶の糸を、必死で手繰り寄せる。

しかし、私がこの世界に転生して既に十八年が経っている。十八年以上前に読んだ本の内容を事細かに思い出すのは、いくら玲玉記を愛読していた私にも至難の業だ。

「なぜ雪媛の代わりに玲玉が青龍国に嫁いだのかしら……やっぱ思い出せないわ」

永翔と玉蘭の悲恋の章ばかりを繰り返し読んでいたからか、一度しか読んでいない玲玉の幼少期の章の内容は、頭からすっぱり抜け落ちてしまっている。

なんともったいないことをしたんだろう。玲玉記の世界に転生することが予め分かっていたら、もっと詳しく全編読み込むこともできたのに。

夏雪媛について書かれた頁を開いた状態で小卓の上に書物を置き、私は頭を抱えた。

「雪媛の持参品の目録が存在するということは、直前まで雪媛が青龍国に嫁ぐ予定だったということよね。夏玲玉の入内は、姉の入内直前に急遽決まったものだったということかしら」

今の時点で分かったことを整理するが、真実にたどり着くにはまだまだ遠そうだ。

（こんな時に、玲玉記の語り手だった陶美人がいてくれたら、雪媛のことを詳しく聞けたのにな……）

懐かしい人のことを思い出し、思わず私の口からため息が漏れた。

私の額に毒を浄化する花鉦を与えてくれたのは、前の皇帝の妃嬪であった陶美人だ。正確に言うと、それは生前の陶美人ではなく、彼女が亡くなって幽鬼の姿となった後のことだったのだが。

陶美人は、密かに想い合っていた後宮太医の許陽秀を皇太后に殺され、陽秀との間に生まれた実の娘とも生き別れになったことで、成仏できずに幽鬼としてこの世にとどまった。

幽鬼となった陶美人は、私が四歳の頃に何者かに毒矢で射られたところに偶然居合わせた。尽きようとしていた私の命を救うために花鉦の力を授け、その見返りとして私の記憶を奪ったのだ。

そして陶美人は私の本当の名である琥珀を名乗り、玲玉記の物語の解説をする

語り手として色々と私に助言してくれていたのだが――

私と永翔様が彼女の心残りを解消したことにより、陶美人は幽鬼の姿から解き放たれて成仏した。もしかしたら今頃、別人としてこの世に生まれ変わっている頃かもしれない。

「陶美人。今こそあなたの力を借りたかったです」

静まり返った房室の中で一人、私は小卓に突っ伏した。

侯遠先生から借りた書物を片付けることもできないほどの、急激な眠気が私を襲う。重たくて半分閉じた瞼の向こう側にうつすら見えたのは、珠珠の姿だ。

珠珠は私の隣に寄り添うように寝転ぶと、しつぽを振りながら小さく鳴いた。

「もう……あなたは呑気ね」

珠珠のしつぽを思い切り掴んでやろうと手を伸ばしたが、眠気には勝てない。珠珠に触れる前に力尽きて、腕を小卓の上に投げ出した。

いつもはここにいるはずの永翔様の顔を思い浮かべながら、私は両目を閉じた。



「にゃあ、にゃあつ！」

（ん？ なに？）

「珠珠、騒ぐな。明凜が起きてしまっ」

「んにゃああつ！」

珠珠の騒がしい鳴き声のせいで、突然夢の世界から引き戻される。

おかしい体勢で小卓に突っ伏していたからか、肩と腰が痛い。

ゆっくり体を起こすと、炕の上に座る私の目の前には永翔様と、その腕に抱かれた珠珠がいた。

「あれ、永翔様？」

「明凜、夜半に起こしてすまない。牀に運ぼうと思っただが、珠珠がこうして騒ぐから」

永翔様が軽く「めっ」と睨むと、珠珠はツンと顔を逸らしてどこかに行ってしまった。

「申し訳ありません、永翔様。うたた寝をしましていましたようです。子琴に言っ何か準備させますね」

急いで炕から下りて沓を履くと、ちょうど子琴が温めたばかりの羹を運んできたところだった。永翔様の訪いに気が付いて、温め直してくれたのだろう。

卓の上に並べ終わると、子琴はニヤニヤしながら私に目配せし、そそくさと房室を

出て行く。

(もう、子琴ったら)

子琴の笑顔を見てみると、今にも「明凜様、愛されてますね!」という冷やかしが聞こえてきそう。

腕を手にして羹を取り分けていると、永翔様は私が毒見をしてしまわないかと窺うように、手元をじつと見つめてくる。

いつもと変わらず私を心配してくれる永翔様の姿に、少し安心した。つい先ほどまでは新しい妃嬪の入内に嫉妬して落ち込んでいたというのに、私も現金なものだ。

「永翔様。ここで作る食事は、子琴が食材からしつかり管理してくれています。侍女が毒見をしてくれていますが、決して危険ではないのですよ」

「……そうか。私のために明凜や子琴にも手間をかけてすまない」

「永翔様はいつもそうやって謝ってばかり! 皇帝陛下がお毒見係を付けるのは当然のことなので、罪悪感でご自分を苦しめないでください。それに、私が後宮に來てもうすぐ一年経ちますが、一度も皇太后陛下から毒を盛られたことはありません」

羹をすくった匙にふうと息を吹きかけて冷まし、永翔様の口元に運ぶ。

すると、永翔様はそれを素直に口にした。

(幼い頃は、食事にたびたび毒が盛られたと聞いたけど……)

呪術を操ることができる皇太后のことだから、冠礼の儀を前に永翔様の毒殺を狙っても不思議ではない。

しかし実際はこの一年の間、永翔様は一度も毒を盛られたことはなかった。

一年前に入内して以降、皇太后が呪術を使ったのは、清翠殿での幽鬼出没事件のときだけ。

私には、それがどうしても腑に落ちない。

「皇太后陛下が永翔様に対して手を緩めたのはなぜでしょうか。清翠殿での一件を考えても、呪術が使えなくなっただけではなさそうですし」

「明凜。私の食事に盛られた毒が誰の手によるものなのか、調べても証拠は出てこなかったんだ。皇太后の仕業だったと決まったわけではない。毒の件で、不用意に皇太后の名を出さぬほうがよい」

「そうですね、失礼しました。気を付けます」

「ああ。今のところ信頼できるのは曹侯遠と蔡雨月、それに商儀くらいのものだ。そのほかの者とは、呪術の話はしてはいけない」

永翔様は、「それと」と言って付け加える。

「毒を盛られることが明らかに減ったと感じたのは、前の皇帝陛下の駕崩の頃から



だったかもしれないな」

顎に手を当てて、永翔様は考え込んだ。

前の皇帝陛下の駕崩というところ、つまり永翔様が皇帝として即位したその時点から、明らかに状況が変わったということになる。

皇帝の代替わりが、皇太后の動きになんらかの影響を与えたのだろうか。

私たちは答えの見えない問いに、考えあぐねた。

「ううん、考えても仕方ありませんね。侯遠先生から書物を借りてきましたし、呪術について調べるうちに、何かが分かるかもしれません」

「そうだな。今は焦っても仕方がない」

「先ほど少し書物に目を通したのですが、皇太后陛下が青龍国に興入れした時の持参品の目録がありました。ただ、皇太后陛下のお名前はなく、代わりに夏雪媛という名が書かれていました」

永翔様は夏雪媛の存在を知らないだろう。玲玉が姉の身代わりで青龍国に嫁いだことは、前世で玲玉記を読んでいた私のみが知る事実だ。

「夏雪媛か。そんな名の妃嬪がこの後宮にいたのだろうか？」

「私にも分かりませんが、もしかしたら皇太后陛下の代わりに青龍国へ嫁ぐ予定だったお姉様だったりして……！ なんらかの事情があつて、急遽その方の身代わりに皇

太后陛下が嫁いできた……とか？」

「妙に話が具体的だな。身代わりか……まるで何かの物語のようだ」

羹を食べながら、永翔様は苦笑した。

（話の振り方がわざとらしすぎたかしら）

玲玉が雪媛の身代わりとして嫁いできた説は、永翔様にはあまり響かなかったようだ。

書物を読み進めていけば、雪媛についてのもう少し具体的な記述が、どこかで見つかるかもしれない。永翔様にはもう少しまとめたから報告することにしよう。

食事を終えて、子琴が卓上を片付けて下がった頃には、もうすっかり深夜になっていた。

永翔様が身支度を整えて牀欄に横になる。私も彼の隣、同じ掛布の中に潜り込んだ。あらかじめ湯婆子で温めておいたのに、永翔様は「寒いな」と言って私の背中に腕を回して抱き寄せた。永翔様の胸の温もりに包まれるこの時間が、私にとって至福のひとつだ。

「明凜。今夜は遅くなってすまなかった」

背中に回された永翔様の手が、私の後ろ髪に触れる。

「眠ってしまう前に、少しでも話がある」

囁くような声の中に、深刻な雰囲気を感じる。今夜ここに来るのが遅くなった理由なら、白容に聞いて分かっているのに。

何を言われるのだろうかと不安になった私は、返事をする代わりに永翔様の胸に顔を埋めた。

永翔様は私と顔を見合わせて話をしたいようだったが、私はそれを拒んで首を小さく横に振る。胸の動きで、永翔様がため息をついたのが分かった。

「……私の冠礼の儀に合わせて、後宮妃に封号を授けることになった。政の都合や父親の地位も関係するから、誰をどの位にするか、なかなか私の思い通りにはいかない」

「そうですか。今日史館を訪ねた時、大勢の女人が青龍殿に向かうのを見ました。いよいよ永翔様も名実ともに皇帝とられますが、皇太后陛下がいる限り、すんなり上手くは進まないでしょうね」

「ああ。今はまだ自由は利かない。だが、これから必ず変えていく。身分の高低にかかわらず、私はこれからも明凜に会いに馨佳殿に来るから」

「……はい。お待ちしています」

永翔様は言葉を選んで遠回しに言ってくれているが、その裏に隠された意図を私は感じ取った。妃嬪の中でも高位となる四妃に、私を冊封することはできないのだろう。

きつとそのことを、傷付けないように優しく伝えようとしているのだ。

身分の高さが皇帝の寵愛の深さを決めるわけではない。だから、安心して馨佳殿で待つていてほしい——永翔様の落ち着いた口調は、そう語っているように思えた。

今夜、永翔様が馨佳殿に来てくれたのは、きつと私を心配してのことだ。

多くの妃嬪が入内し、冠礼の儀に向けて次々に皆の封号が決まっていくことになる。そんな中で、私が四妃に選ばれなかったことを永翔様以外の者の口から聞かされ、傷付くのではないかと氣遣ってくれたのだろう。

これまで、永翔様は馨佳殿に足しげく通ってくれた。

だが、四龍を束ねる青龍国の皇帝という立場では、四妃を差し置いて一人の妃ばかりを寵愛するわけにはいかなくなるだろう。後宮の掟や、世継ぎ誕生への周囲からの期待が、これからの永翔様を縛ることになる。

その現実を、理解しているつもりではいる。

それなのに、目の前にある永翔様の温もりが、今にも消えてしまふ儚い幻のように感じられて、堪らなくなる。

私はもう一度彼の胸に深く顔を埋めた。

永翔様の胸の鼓動を聞きながら、今だけは永翔様を独占したい——そんな気持ちにとらわれた。